

子育て支援拠点の実態調査

A722013 鈴木春奈 A722017 谷本七海
A722019 肥田愛永 A722021 水川真穂

目的 - 認知度を上げ、利用者を増やすためにより良い支援策を考える

背景

少子化！

「経済的不安定の増大」「結婚・出産に対する価値観の変化」
「育児環境の変化」

Covid19！

出生率に低下に拍車がかかる…子育てに関する不安



これらの状況から、保護者の育児不安を解消する支援策が求められていると私たちは考えた。支援策の一つである親子の居場所として地域子育て支援拠点が存在している。しかし、全国的に利用者が少ない傾向にあることが先行研究から明らかになった。そこで地域子育て支援拠点の実態を調査し、それを元にかにその認知度を上げ、利用者を増やすか、また、より良い支援策とはどのようなものかについて考察することを目的とする

方法 - 子育て支援施設と保育園での調査

調査① 子育て支援施設

<方法>

子育て支援施設の利用実態を調査するためにインタビュー調査を行った。子育て支援施設の利用者、子育て支援施設に勤務しているスタッフを対象とし、2023年9月14日に「なかよし広場びよっこ」、2023年10月8日に「そうじゃ子育ての駅ほのぼの」で実施した。インタビュー内容は以下のとおりである。

- 利用者**
- 施設をどのように知ったか
 - 利用頻度
 - 子育て支援施設に期待すること
 - 利用しやすくするにはどうすればよいか

- スタッフ**
- 利用者について
 - どのような広報活動を行っているか
 - 利用者増加のために実施したこと

調査② 保育園

<方法>

子育て支援施設で現在も利用している方と保育園に通う子を持つ保護者で利用の有無がどのように変化するかを比較するために調査②として総社私立みどり保育園にアンケート用紙による調査を行った。調査対象は総社私立みどり保育園に通う3歳児の子を持つ保護者とし、2023年9月2日～5日に実施した。調査内容は以下のとおりである。

- 利用の有無・回数
- 何を通して施設を知ったか
- 子どもの人数
- 周囲の協力者の有無（祖父母などの親族のみ）
- 開催日時などの希望
- どんな施設があったら利用したいか

結果

利用者

- 施設を知った経緯
 - 市役所
 - 出産後家庭訪問
 - SNS
- 利用頻度
 - 週に一度
 - 2日に一度
- 期待すること
 - 預けられる
 - 予約しやすく
 - 親子参加のイベント
- 利用しやすくするには
 - ポスター
 - チラシ配り
 - 保護者同士の交流会
 - 一人でも入りやすい雰囲気

スタッフ

- [なかよし広場びよっこ]
- 利用者について
 - 20～30組/日
 - 広報活動
 - SNS
 - ポスター
 - チラシ配布
 - 工夫
 - 広場での声をもとに新たなイベントの計画
- [総社子育ての駅ほのぼの]
- 利用者について
 - 1～3歳
 - 広報活動
 - SNSのみ
 - 工夫
 - 遊具で差別化
 - SNS映える空間
 - 遊び場と区切られた飲食スペース

施設についてどこで知ったか

- 市の広報誌
- SNS
- 検診時の資料
- 市役所のこども課
- 総社市のLINE
- 知人
- リブ
- 保健師

(なぜ利用しなかったのか)

- 時間がない
- 年齢制限があったから
- 0歳児のイメージがある
- 人見知り
- きっかけがなかったから
- 交流の場を必要としなかったから

(どうすればもっと利用しやすくなるか)

- 中に入りにくい雰囲気をなくす
- 子どもだけでなく親が一息つける環境にする
- 子どもと一緒に気軽に聞けるような子育て講座を開く
- 日時の多様化
- 場所の増設
- SNSでの情報提供
- 男性でも入りやすい環境づくり

まとめ

①利用者を増やすために

- 各施設の機能についてSNSやHPを見るだけでは伝わりきらない → 各子育て家庭がそれぞれのニーズに応じた施設を選択し利用できるような仕組み作りが必要
- 子育て支援施設の利用にあたって「最初の一步が踏み出しづらい」という声が多数ある → 初めての利用でも知り合いがいなくても気軽に利用できることなど実際に利用している先輩ママ・パパの感想を知れる機会をつくる
- 市内、もしくは県内のすべての子育て支援施設の情報に加えて各施設の特徴や利用者の声をまとめたサイトを作成する

②より良い支援策

イベント時のみ利用し、その後の継続的な利用はしていないという意見が複数上がったことから、イベントの開催以外にも、親子の継続的な利用に繋げるための支援策の案として、以下の3つを考えた。

・年齢でスペースを区切る

3歳未満を対象としているびよっこでは、公園などには年齢の大きい子どももたくさんいて、幼い子どもを安心して遊ばせられないという声が聞かれた。一方対象年齢を就学前の子どもと幅広く設定している総社子育ての駅ほのぼのでは比較的年齢の大きい子どもが多く、施設を利用したくても対象年齢を過ぎて利用できないという声があった。年齢によって施設を区分することも考えられるが、家からの距離などでも通いづらくなることも懸念される。そこで、一つの施設内で、3歳以上と3歳未満など年齢によってスペースを区分することでより多くの親子が安心して利用できるのではないかと考える。

・託児

実際に利用されている方からは、今の制度で十分満足しているという意見が多く聞かれたが、さらにあれば嬉しい制度として「託児」を挙げられる方も多くいた。子どもを連れただけは買物等にも通常より時間や労力がかかってしまうし、四六時中育児に追われているとたとえどんなに子どもを可愛く思っていたとしても肉体的・精神的に疲れがたまってしまうため、ほんのひとときでも1人の時間を作ることでもフレッシュにもつながり、良好な親子関係を築くことにも繋がると考えられる。今回インタビューに伺ったびよっこは大型商業施設内に設置されている施設であるが、そのような場で託児サービスがあれば、子どもを預けて買物をしたり、商業施設内の店舗で親がリフレッシュの時間を持てたりして、有意義なサービスになるのではないかと考える。

・親同士が話せる空間（その間子どもを見てくれる制度）

子育て支援施設の機能として、子どもを遊ばせられることの他に、親同士の相談やリフレッシュを求める声もあがった。そこで、施設内に保育士など専門職が子どもをみるスペースと親同士もしくは親と助産師などの専門職と一緒に話をできるスペースを分けて設置することで、安心して相談やリフレッシュができると考える。

課題 - イベント参加だけで終わらせない

